

飛鳥資料館本館及び売札所の保存と活用に向けて

令和6年9月9日 奈良文化財研究所

このたび、奈良文化財研究所は、飛鳥資料館本館及び売札所の文化財としての価値に鑑み、文化庁に対して国の登録有形文化財（建造物）としての登録を申請することとした。

これを契機として、その文化財としての価値を広く市民と共有するための調査研究と情報発信に努めるとともに、望ましい保存・活用に向けて努力していくこととする。

1. 歴史的経緯

戦後の高度経済成長のなか、日本各地で開発によって景観が無秩序に破壊される状況から、古都の飛鳥では歴史的風土と文化財を守ろうという機運が高まった。一連の動きのなかで、1970年の閣議決定を経て、1975年飛鳥資料館は明日香村奥山の現在地に開設された。

学識経験者による設置準備会議は、歴史的景観を損なわないよう、東と北を低い丘で囲まれた比較的低い谷地が選ばれ、設計にあたっては、現地形を大きく変えず、建物は平屋とし、屋根に瓦を葺くことが定められた。そして基本設計を、東京国立博物館東洋館^{※1}（1968年）や東京国立近代美術館^{※2}（1969年）など多くの博物館・美術館を手掛けてきた谷口吉郎^{※3}に依頼した。

基本設計ののち、奈文研による敷地内の発掘調査で飛鳥時代の石組暗渠（上の井手遺跡）が発見され、設計変更がなされた。施工は村本建設、展示設計・施工は日本エキシビション企画プロダクションが担当した。飛鳥資料館本館は1974年3月に竣工し、売札所は翌1975年3月に竣工した。

2. 文化財としての価値

飛鳥資料館の建造物のうち本館と売札所は、以下の3点から有形文化財（建造物）としての高い価値を持つ。

- (1) 古都飛鳥の歴史的風土と文化財を保存・活用する拠点施設として建設された歴史的価値を有する。
- (2) 現地形を大きく改変せず、発掘調査で発見された地下遺構を保存するとともに、平屋とすることで高さを抑え、屋根に瓦を葺くなど、飛鳥の本質的な価値を形成する地下遺構と景観の保存を実現している。
- (3) 大きな切妻造の屋根、左右非対称の雁行した平面形状、縦格子付きの縦長窓、欄干付きの濡れ縁など、日本にふさわしいモダニズムを追究した谷口吉郎による造形は、古都・飛鳥の歴史的景観の形成に寄与している。

3. 今後の方向性

(1) 保存

飛鳥の歴史的風土に配慮し、良好な景観の形成に寄与する外観の意匠を後世に継承する。

(2) 活用

飛鳥の文化財と歴史的風土を保存・活用する拠点として、展示や各種企画を通じて建造物としての価値を発信する。

※1 東京国立博物館東洋館 東京都台東区上野公園。緩やか勾配の切妻屋根、正面の柱列、欄干付の濡れ縁など、伝統的意匠が外観にあらわれた谷口吉郎の代表作の一つ。

※2 東京国立近代美術館 東京都千代田区北の丸公園。ピロティを支える太い柱列、連続する梁など、近代的な外観を基調としながら伝統を表現した谷口吉郎の代表作の一つ。

※3 谷口吉郎（1904～1979） 「清らかな意匠」を理念とし、日本にふさわしいモダニズムを追究した建築家。博物館明治村創設に尽力し、初代館長を務めるなど歴史的建造物の保存への貢献も大きい。